



アダム見聞録

「世界の孫悟空」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

僕の仕事の中で一番うれしいことは保育園を訪問することです。一緒に遊んだり、たこあげや豆まきなどの行事に参加したりと、園児との交流はとても楽しいです。また、年に数回同じ園を訪問することがありますが、前回一緒に遊んだ園児の成長を見ることができるといっ楽しみもあります。

中でも特に面白いのは発表会です。不安げな小さい声で練習をしていた園児が、本番になると親の前で自信たっぷりの元気な声で合唱や演技をし、観客を笑わせたり感動させたりします。先月、ある保育園の発表会を見ていた時、自分の子どもころを思い出させる発表がありました。それは年長クラスの「孫悟空の冒険」という劇でした。

発表会の後、「孫悟空って知っていますか?」と聞かれましたが、孫悟空が登場する吳承恩の小説「西遊

記」は中国と日本だけでなく、さまざまな国の人々に愛読されています。1942年にイギリスの東洋学者ウェーリー（1889～1966年）が「西遊記」の一部を英語に翻訳し、英語圏の人々に紹介しましたが、イギリスやオーストラリアでは多くの人が「西遊記」を知ったのはテレビドラマがきっかけになったと思います。このテレビドラマはイギリスやオーストラリアのものではなく、堺正章や夏目雅子が出演した日本のドラマで、英語に吹き替えられたものでした。

このテレビ版「西遊記」は子どもにも大人にも大人気で、当時オーストラリアのテレビガイドのおまけに堺正章のポスターが付いたり、家庭で子どもたちが「孫悟空ごっこ」をしたりするほどでした。初回放送は20年以上前ですが、オーストラリアでは何回も再放送されているだけでは

ビデオやDVDも発売されています。なぜ「西遊記」が人気があるのでしょうか。まずは、強くて生意気な孫悟空のキャラクターの魅力。それから三蔵法師、猪八戒、沙悟浄などの登場人物が、それぞれ長所や欠点を持ち、中国や日本の人々に限らず、多くの国の人が共感する性格が描かれていたためだと思います。

そのような「西遊記」は僕を楽しませてくれただけではなく、仏教や道教、中国の神話の世界など、当時ほとんど意識しなかった「アジア」に興味を持たせてくれました。ドラマの中で使われた万里の長城や寺院、仏像の映像を見て「不思議な景色だなあ、あれはどこだろう?」と調べてみたくなったことを覚えています。小説「西遊記」を訳したウェーリーは中国語と日本語をマスターし、「源氏物語」など、様々な中国や日本の古典を英語に翻訳したのですが、

自分のイメージと違ったらがっかりすると言い、一回も中国や日本を訪れませんでした。しかし僕は「西遊記」との出会いからもらった「アジア」への興味から日本にも関心を持ち、ここまで来たのかもしれない。たくさんの方が「アジア」に興味を持つようになり、また自分も「アジア」の国々を知るきっかけを与えてくれた「西遊記」。凄いいと思いますか。



興味のあるアジアの風景
～日本の名刹（鎌倉・建長寺）～



アダム見聞録

「思い出の場所になるとき」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

13年も続いてきた大府市とオーストラリアのポート・フィリップ市の姉妹都市提携。職員交換派遣事業や中学生の海外派遣事業などさまざまな形で交流を続け、両市の多くの市民にとって相手のまちが思い出の場所になってきました。大府とポート・フィリップの場合、このような姉妹都市交流が現在まで続いているのは、両市の姉妹校交流のおかげだと思います。

先月の13日から19日まで、姉妹校交流の記念イベントに出席するためにポート・フィリップ市の訪問団が大府市を訪れました。そのイベントは大府東高校とエルウッド・カレッジの姉妹校提携20周年記念式典でした。大府東高校とエルウッド・カレッジは20年という期間をかけ、隔年の短期の訪問団や長期の交換留学生の派遣、受け入れを続けてきました。

ポート・フィリップ市の代表とエ

ルウッド・カレッジの校長、教員、生徒の他に、石ヶ瀬小学校の姉妹校であるセント・キルダ小学校の先生と生徒も、今回の訪問団に入っていました。高校の20周年だけではなく、セント・キルダと石ヶ瀬の両小学校の姉妹校提携が10年を迎えることも祝賀されました。

今回、私は主にポート・フィリップ市の副市長の通訳や案内をしていました。そのため、学校の訪問団との関わりは少なかつたですが、到着した夜にセント・キルダ小学校の訪問団に会った時、生徒が日本にとっても興味を持っていることに驚きました。

スタジオジブリのアニメビデオを何本持っているかとか、今まで寿司を何回食べたかなどを、小学生らしく自慢し、張り合っていました。また、雑誌の綴じ方がオーストラリアと違うことや、コンビニエンスストアの前に貼られた、オーストラリアでも有名な洋画のポスターなどの文

字が日本語になっているということと子どもたちは大騒ぎでした。

初めての来日で何もかもが不思議で、その新鮮な目で大府を見る生徒たちの反応は面白かつたです。この子どもたちが今回、日本の家庭でのホームステイや学校での生活がどんな刺激になったか、見たかつたです。



セント・キルダ小学校の生徒(石ヶ瀬小学校)

帰国する日となり、空港で訪問団の一員として来訪したポート・フィリップ市副市長のジャネット・クリビスらを見送るとき、私たちはそれぞれに今回の訪問の感想を話し、少し涙ぐんでしまいました。

クリビス副市長とご家族は長年、大府と深いつながりを持っていたので、姉妹校、そして姉妹都市の交流が長く続いていることに感動したようです。

大府東高校で行われた式典において、クリビス副市長が祝辞で「近ごろは結婚だってこれほど長く続かないことが多い」と言われたように、20年は感心するほど長いですね。学校の訪問団の皆さんがホストファミリーの方々とお別れをした時も、涙はぎっと多かつたと思います。

今回の訪問団の皆さんにとって、大府はたくさん思い出の場所となったことでしょう。



アダム見聞録

「妹の結婚式に行って来ました！」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

先月、妹の結婚式というとてもうれしいイベントに出席するためにオーストラリアに一時帰国しました。オーストラリアでも結婚式の挙げ方は色々あります。妹の結婚式を見ながら日本の結婚式と幾つかの相違点に気が付きました。

もし日本人が妹の結婚式を見たら、簡素（質素？）さに驚くと思います。まず、新郎新婦の服装は日本で流行している、おとぎ話に出てきそうな王子様とお姫様のようなものではなく、シンプルでおしゃれな感じでした。妹は白いカクテルドレスを思わせるようなさつぱりしたワンピース、新郎はネクタイのないスタイリッシュな黒いスーツ姿で登場し、二人とも落ち着いた感じで格好よかったです。

挙式会場も日本と違って、教会や

式場ではなく、海辺でした。妹は小さいころから海が好きで、きれいな砂浜で結婚式を挙げるのが夢だったので、ゴールド・コーストにあるカラビーチで式を挙げました。40人ほどの親族や友人、多くの通行人の前で二人はセレブラント（式の進行役）の指導に従い、結婚の誓いと指輪を交換して結ばれました。

オーストラリアでもあいさつや祝辞のない結婚式は考えられません。しかし日本の多くの結婚式と違って、妹の結婚式では新郎からの出席者へのお礼と父からの祝福の言葉という2つのスピーチだけで、新郎新婦の上司や同僚のあいさつはありませんでした。これはオーストラリアでは友だちや親戚でない限り、上司や同僚を結婚式に招待しないからです。そのほかの大きな違いは二人に「ご祝儀をあげないことです。ご祝儀の代わりに、電化製品や食器やタオル

など新しい生活に必要なものを贈ります。しかし妹の場合、彼と何年間も同居していたので、全てのものがそろっていました。プレゼントを考えていた時、とても悩んでしまい、「日本の風習は楽だなあ」と思いました。

これから色々な思い出を作っていくので、アルバムを使い、二人の家族の記録を作ってもらおうという考えです。たくさんいい思い出を作って欲しいと思います。

国によって結婚の祝い方は違いますが、親族や友人の新郎新婦への祝福の気持ち、そして二人の夢や希望はこの国でも同じですね。



カラビーチで結婚式を挙げる二人



アダム見聞録

「日本からのお土産に…漫画!」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

オーストラリアに旅行に行く日本のかたに、ホストファミリーやオーストラリア人の友達に、どんなお土産を持って行くと喜ぶかと、たまに聞かれます。相手が若い人であれば、漫画はお勧めです。

オーストラリアに帰る度に、日本の漫画やアニメが少しずつ人気になってきているのでびつくりします。高校生のころ（約15年前）、アメリカの出版社が日本の漫画の面白さを認めて、実験的に英語版を少数で出版し始めました。左とじてオールカラーのアメリカの漫画に慣れた欧米の読者に、右とじてモノクロの日本の漫画が売れるのかという不安があったため、色をつけたり、左とじにするように絵をひっくり返したりして、欧米の漫画読者にとって親しみやすい形にしました。（絵が逆になることで、看板のようなものを描き直す必要が出て、漫画家は大変な苦労をしたようです。）極端なケ-

スでは、漫画が完全にアメリカの漫画家によって描き直された例もありました。

今ではオーストラリアの本屋にも現在日本で流行っているものから「鉄腕アトム」のオリジナル版までの日本の漫画の英語版がたくさん置いてあります。さらに驚いたのは、日本と同じ右とじて、白黒のまま出版されているものが多いことです。今の欧米の若者にとって、こういう違いまでもが日本の漫画の魅力の一つかもしれません。

日本の漫画は人気があるだけでなく、欧米の漫画にも影響を与えています。アメリカやオーストラリアでは漫画はアメリカ風のコミック（「スパイダーマン」、「バットマン」、「Xメン」のようなもの）と日本風の「manga」の2種類に分かれています。最近のコミックでも、日本の漫画でよく見る絵を中心とした多くのページをかけた、映画のよ

うな描き方をよく見かけるようになりました。一部のコミックの絵自体でも、日本のアニメと同じような色使いや登場人物の描き方など、日本の漫画の影響が見られます。

「manga」というのは日本の漫画の英語版だけでなく、欧米人が日本の漫画をイメージして「日本の漫画のスタイル」と思われている描き方を使ったオリジナルものもあります。オーストラリアを舞台にしたオーストラリア人による「manga」も最近登場しています。日本の漫画に惚れて、漫画家を目指す若者も多いです。オーストラリアの本屋の美術コーナーでアメリカ風コミックの描き方の手引書を2、3冊見ましたが、その隣に約10冊の日本風漫画の描き方の手引書が置いてありました。

もしオーストラリアに行く予定で、子どもや学生に会う予定でしたら、けん玉や紙風船もいいですよ。そ

て、日本の漫画も安くて喜ばれるお土産になると思います。



英語で翻訳された日本の漫画





アダム見聞録

「帽子から学んだこと」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

蒸し暑い8月に入りました。どれだけ長く日本にいても、真夏の蒸し暑さにはなかなか慣れません。故郷のメルボルンの夏の気温は、たまに40度を超えますが、湿度はあまり高くないため、個人的には居心地がいいです。しかし、オーストラリアの夏だっという感じがあまりありません。日本でもよく知られているように、紫外線が非常に強くて、あっという間に日焼けしてしまいます。

皮膚ガンから体を守るために、保育園や小学校では室外に出る前に、子どもは自分で日焼け止めを塗り、頭に顔や首をカバーする帽子をかぶらなければなりません。たいてい、周りにつばが付いているハットか、前につばが付く、後ろに耳と首を隠す布が垂れているキャップのどちらかの帽子です。

小学校の頃、夏にキャップ型の帽子をかぶらされていました。祖母は布の垂れた帽子が、戦中の日本軍の

帽子に似ているから気に入らないと、一言がきっかけで、太平洋戦争のこと、日本とオーストラリアが敵だったことを初めて知りました。

戦時中、とくに1942年（昭和17年）に日本はオーストラリアへ進出してくると、多くのオーストラリア人は思っていたらしいです。僕が大学で日本語を勉強し始めた頃、もし日本が戦争に勝っていたら、小さい頃から日本語を学んでいたかもしれないと、祖母は冗談を言いました。

戦争を経験したオーストラリアの高齢者は、日本に対して嫌な感情を持っていると思っている日本の人々もいるかもしれません。祖母から聞いた戦争の話は、帽子に対するコメントだけでしたが、その世代の人たちは日本をよくは思っていないと、僕はずっと思っていました。だから初めて日本人の友だちを紹介するときにはかなり悩みました。しかし、友だちを会わせてみたら、祖母は少し

の抵抗もなく、オーストラリアの感想、オーストラリアのどこに行ったか、これからどこに行くのか、日本の生活など、とにかく日本人がよく外国人にもするような質問をたくさんしたり、一緒に笑ったりして、いつものおぼろげな笑顔で、僕の心配は余計なものでした。それから何人かの日本人の友だちに会った

びに、いつも喜んで、温かく歓迎してくれています。たとえ自分の孫が日本人と結婚したとしても、相手を喜んで受け入れてくれると思います。

戦争の思い出を持ちながらも日本人に対して悪意を抱かず、国籍や民族などの違いを越えて、同じ人間として相手を受け入れる人は、祖母の世代にも多いと

思います。でも、その世代が作った歴史、その世代が経験した戦争、そしてその戦争がなぜ起こったか、二度と起きないように、僕は勉強して知るべきだと思います。

毎年8月、終戦記念日が近づくと、真夏の暑さでその帽子のことを思い出して、自分にはまだわからない歴史の真実を知りたいと思います。



日本語とともに

日 本に来る外国人には、短期滞在をする観光客もいる一方で、さまざまな国からさまざまな仕事をしに来る人もいます。一週間程度のホテル泊まりで観光という生活なら、日本語が話せなくてもほとんど不自由ないと思いますが、何年という期間、働きに来る外国人だと、日本語が話せないと困ることは多いに違いありません。日本語を全く話せずに来日し、働いたりする勇気のある外国人を、私は尊敬します。

日本語が話せない、迷ったときに道を尋ねられない、自分に合ったサイズの洋服があるか聞けない、レストランでメニューが読めないなど、予想されるトラブルがあります。地域社会への参加や友達を作ることも難しいでしょう。さらに日本語でしか提供されていない情報やサービスも多いため、自分にどんな権利や義務があるのかわからず、日本語を話せる人と同じような生活ができません。

日本語を勉強すると、言葉だけでなく、日本の文化や社会の勉強にもなり、日本での生活に役立つ知識と知恵が身に付きます。日本人と外国人との間に起きるトラブルの主な原因の一つは、日本の生活習慣やマナーに関する外国人の理解の足りなさによるものです。企業などが外国人を日本に呼ぶときに、日本語力とともに今からどんな国に住むか、地域の人たちとうまく付き合うにはどんなことに注意すべきか、事前に指導していれば、いろいろな問題が防げるでしょう。

多くの外国人は、日本に来たことをうれしく思

い、新しい言葉や文化を学び、周りの方々と仲良く付き合い、この来日の機会を生かしたいと思っています。そのため、各地の日本語教室に通い、日本人ボランティアの指導のもと、一生懸命日本語を勉強しているのです。

大府でも、大府市国際交流協会のボランティアが毎週日曜日の午前中、日本語教室を開講しています。日本語を覚えることで、日本のすばらしさを自分自身で探すための力を養う機会を提供しています。日本語教室のボランティアに興味がありましたら、大府市国際交流協会事務局までお問い合わせください。

●大府市国際交流協会事務局 電話(45) 6266



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



▲日本語教室で活躍するボランティア

『広報おおぶ』2006年9月1日号

ブラックフェイス

数

カ月前の朝のことです。テレビで、ある日本のバンドのメンバーが顔を黒く塗った、いわゆる「ブラックフェイス」で登場したということでショックを受けました。

「ブラックフェイス」は19世紀前半のアメリカで始まりました。白人が炭などで顔や手を黒くし、アフリカ系アメリカ人の独特なしゃべり方でコメントをしたり、歌ったり、踊ったりするブラックフェイスショーが一時、欧米で流行しました。白人が想像するアフリカ系アメリカ人の真似で、人種差別的な表現の一つと思われ、現在欧米ではブラックフェイスは見られません。ブラックフェイスが一部の人を傷つける行為として意識されてきたため、日本でいまだにそのような格好でパフォーマンズをする人がいるという事実を知って、数十年前にタイムスリップでもしたかと思ったほど驚きました。

実は、そのブラックフェイスバンドはアフリカ系アメリカ人の歌手やミュージシャンへの敬意を払うつもりで顔を黒く塗って歌っていたらしいです。彼らの真意を知ったら、ブラックフェイスがすぐ差別だと思い込んでしまった自分の反応を反省し、判断する前にバンドのメンバーの意思を確かめるべきだったと思いました（しかし、今回のバンドの件では、単に敬意を払うだけだったら、ブラックフェイスまでする必要はあったのでしょうか。尊敬しているパフォーマーの歌を歌うぐらいで気持ち十分伝わったのではないかとも思います）。

他人種の人の真似をしたら、どこまでが冗談か、



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



どこからが差別かは、国、民族、人によって違います。僕がブラックフェイスを見て怒っても、アフリカ系アメリカ人は笑って気にしないかもしれません。インターネットで調べてみたら、「悪意がなければいいんじゃない？」という人も少しいましたが、「まさか2006年にブラックフェイスなんて…」という意見が多かったです。多くの国でブラックフェイスが見られなくなったことには理由がある気がします。

「人種が異なる」ということには重大な問題が含まれています。特に外国人が増え、多文化共生をしようとしている社会の中で生活するためには、さまざまな「人種」の感覚を意識し、気をつけていきたいと思います。

『広報おおぶ』2006年10月1日号

さらに深まる交流を実感

今

年は日豪友好協力基本条約締結30周年です。ポート・フィリップ市では記念イベントが開かれ、私も大府市からの訪問団の一員としてポート・フィリップ市に行ってきました。

10月8日、石ヶ瀬小学校の姉妹校であるセント・キルダ小学校で、「ア・テイスト・オブ・ジャパン・フェスティバル」が催されました。ポート・フィリップ市民が和太鼓や書道、合気道、剣道など、日本のさまざまな伝統文化を体験することによって、日本を知るといふ新しいタイプのイベントでした。合気道や剣道、和紙を使った包装の仕方を紹介するラッピングのワークショップ（体験コーナー）やマンガの描き方を紹介するワークショップが、子どもだけでなく大人にも好評でした。他にもポート・フィリップ市の小学生による特別なパフォーマンスも見せてもらいました。大府とポート・フィリップ両市の図書館の間で行われている資料交換事業で贈られた「うらしま太郎」の絵本を見たポート・フィリップ市の小学生が、図書館のスタッフとともに劇を構想し、約6週間かけて稽古をしたそうです。歌や踊り、それから子どもの知っている日本語が交じった、とても面白い劇でした。

その中で参加者が一番多く集まったのは、茶道のワークショップ。オーストラリアでは合気道や空手、柔道など、日本の武道の教室やクラブはよく見かけますが、茶道を見る機会はありません。このワークショップでは、広島で茶道を習ったオーストラリア人の先生が本格的な茶道を見せ、参加者が

らの細かい質問に答えていました。このようなイベントの様子からもポート・フィリップ市民の日本文化への関心の高さがうかがえます。

「ア・テイスト・オブ・ジャパン・フェスティバル」の後に、ポート・フィリップ市内のホテルで、姉妹都市レセプションが行われ、ポート・フィリップ市長のほか、これまで両市の姉妹都市交流にかかわった多くの方々から歓待を受けました。レセプションで、久しぶりの再会を喜ぶ両市の市民の姿が見られたことはとてもうれしい出来事でした。これからも多くの市民が、ポート・フィリップ市を訪問し、友だちを作り、姉妹都市交流の楽しさを実感しながら、さらに交流や理解を深めてもらえたら素晴らしいと思います。



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



▲茶道についての説明を行うオーストラリアの青年

『広報おおぶ』2006年11月1日号

世界共通の言葉？

日

本に来て、日本人の英語への熱意に驚きました。その熱意の理由を尋ねてみると、「英語は世界共通の言葉だから勉強している」という答えが何度も返ってきました。では、英語さえできれば世界の人々と交流し、トラブルのない意思疎通が本当にできるでしょうか。

最近、私は中国の蘇州市に行く機会がありました。上海から西へ約100キロ離れた2500年の歴史を誇る運河の街です。中国の健康モデル都市の一つで、WHO健康都市連合の総会の開催地でした。太平洋周辺地域から何百人もの人たちが集まり、私は大府市代表団の通訳として総会に参加しました。総会は中国語と英語で進められ、英語が母語の私にとって総会自体は理解しやすかったのですが、会場の外での状況はだいぶ違いました。

一日目の夜、私たちはレストランに行きました。そのレストランは日本語が通じないとガイドブックには書いてありましたが、英語ならなんとかかなると思っていました。しかし、メニューを出してもらうと中国語のメニューしかなく、ウェイトレスには英語がほとんど通じません。通訳のために私はそこにいたのに、自分の話せる言葉が通じなくて、とても悔しかったです。(ウェイトレスが店の紹介用の写真付きパンフレットを持ってきてくれたので、写真とメニューの漢字を参考にしてなんとか注文ができました)

英語圏の国ではないのに「英語が話せるから大丈夫だ」と思っていた自分の考えは甘いだけでなく、

失礼だったような気がしました。英語圏でない国を旅行する場合、その国をよりよく知るためには現地の言葉でさまざまな人々と話したり、自分で探検したりした方が良いと思います。

日本には、困っている英語圏の外国人観光客に英語で声をかけてくれる親切な方がたくさんいます。しかし、世界には観光客に合わせしてくれる国ばかりではありません。ある国では、現地の人が観光客に英語で話しかけることに立腹し、相手の英語が理解できても英語で返事をしない人もいると聞いたことがあります。そう考えると、英語を使うことが相手に対して失礼になることもあるので、その国の言葉を少しでも覚えて使ったら、相手の人や国、文化に対する尊敬の気持ちが伝わるでしょう。

海外に行くときはしっかりと勉強して、英語だけに頼らずに有意義な交流ができればうれしいです。



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



▲第2回WHO健康都市連合西太平洋地域総会の様子（蘇州市）

『広報おおぶ』2006年12月1日号